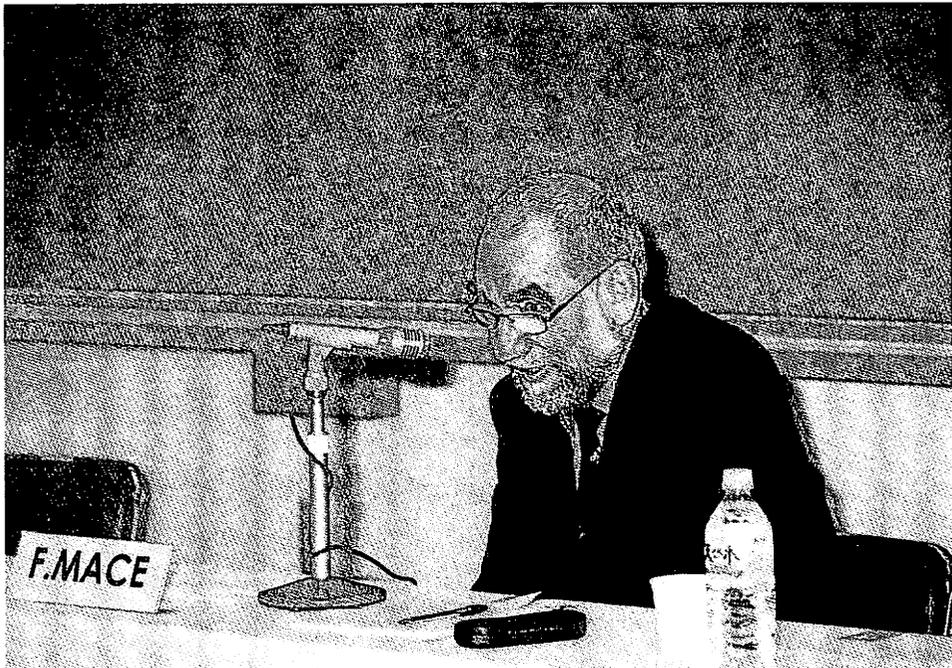
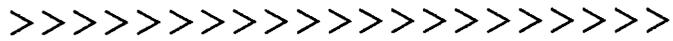


<第3セッション>

フランスにおける神道研究

フランソワ・マセ



## I はじめに

イギリス、ドイツ語圏、アメリカやオランダと比べると、フランスの日本研究の中では言うまでもなく、神道研究の歴史はとても浅いことを認めなければなりません。

1865年にフランスで初めて東洋語学校で日本語講座を開いたレオン・ド・ローニ (Leon de Rosny) 氏は古代中国語から日本語の勉強に入りましたが、日本に一度も滞在していないので、同じ時代のイギリス人やドイツ人の研究者と比較できないのは事実です。ド・ローニ氏は、日本書紀の神代巻をフランス語に訳しましたが、その翻訳は当然なことかもしれませんが、評価されていないのです。その後、宣教師であったマルタン (J. M. Martin) 氏は1920年代に、『古代神道』(*Le Shintoisme ancien*) という本を発表しましたが、アストン (William George Aston) やチェンバレン (Basil Hall Chamberlain) やフロレンツ (Karl Florenz) の著書と比べると、ド・ローニの仏訳と同じように、はっきりいえば、価値がひくいと言わなければならないのです。

ある意味でフランスの日本研究はシャルル・アグノーエル (Charles Haguenaer) 氏からはじまったと言えます。アグノーエル氏は1930年代、日本に渡って、本土、朝鮮、沖縄、台湾で調査を行って言語学、民俗学の研究を行ったのです。神道に関して鎮魂祭という儀礼について素晴らしい論文を発表しました。

## II 神道研究の現状

さて、神道研究現状の問題にもどります。

現在のフランスにおける神道研究は、例外はほとんどなく、東洋学の中の日本研究の一部に入っています。というのは、フランスの大学制度内では、宗教学は独立した専門としてほとんど存在しないからです。宗教講座がある場合は、もちろんキリスト教が専門の研究対象になります。ただ一つの例外は、国立高等研究院です。この研究院の第五部門は宗教学部と呼ばれます。そこでは、ヨーロッパの宗教以外の、世界中に存在するすべての宗教が教えられています。その中には、中国や日本の仏教、日本の民衆信仰 (民間信仰) の伝統という講座がありますが、神道あるいは神道学という専門講座はまだないという現状です。

といっても、フランスで神道についての神道研究がないということではありません。確かに、仏教の専門家の方が圧倒的に数が多いのですが、今、日本文化という広い学問領域で活躍している研究者の間で、神道のことに触れる研究者は初めは五、六人にすぎないかと思われましたが、結局数えあげてみると十五人以上います。それでも、多いとは言えません。

整理してみれば民俗学、歴史、宗教学、文学などという分野の中に位置づけることができます。

まず、民俗学の立場からみて、神道を取り扱う研究者としては、以下の名前があげられます。

ルネ・シフェール (René Sieffert) 氏 (元東洋言語文化研究所教授) は、1950年代に日本に滞在していた時、柳田国男に会って現地調査をしました。鞍馬の火祭についての記事、また神道などを紹介する『日本の宗教』(*Les religions du Japon*) という本を書きましたが、その後、古典文学の分野に向かったのです。しかし、今年、『万葉集』のフランス語の全訳を完結出版しました。

ジェラルド・マルゼル (Gerard Martzel) 氏 (元東洋言語文化研究所教授) は、能と民俗芸能という分野で活躍していましたが、現在は退職しています。『仮面をつけた神—日本における祭』(*Le dieu masqué, fête et théâtre au Japon*) と題する演劇と翁についての著作があげられます。この本の目的の一つは、芸能を媒介にして、日本の祭を分析することにあります。

アンヌ・ブシ (Anne Bouchy) 女史 (フランス極東学院) は、五来重の弟子になり、民俗学の専門家になった学者です。宗教の分野では彼女は習合信仰、とくに修験道に自分の研究の重点を置きました。著作物としては、『稲荷信仰』、『しらかたの神託』(*Les oracles de Shirakata*)、『神々は山を去って行くだろうか—巫覡の他者性とアイデンティティ—』などがあげられます。

シモーヌ・モクレール (Simone Mauclair) 女史 (国立科学研究センター、日本文化) は、『昔話から小説へ、日本のシンデレラ 落窪物語』(*Du conte au roman, un cendrillon japonais l'Ochikubomonogatari*) という本の中では古典文学を民俗学的方法をつかって分析する試みをしました。その後、『日本伝統社会における共同体と家』(*Collectivités et Maisons dans la société japonaise traditionnelle*) というようなテーマの研究へ向かいました。最近、四国の祭文、沖縄の祭を研究しています。

ジョゼフ・キブルツ (Josef Kyburz) 氏 (国立科学研究センター、日本文化) は、『日本における祭祀と信仰—開田村』(*Cultes et croyances au Japon Kaida*) という地域調査の記録があげられます。最近、明治維新の大教についての『神風のような』(*Tel une bouffée de vent divin*) という論文を発表しました。

ジャン=ピエール・ベルトン (Jean-Pierre Berthon) 氏 (国立科学研究センター、日本センター) は、新宗教の専門家であり、教派神道、新新宗教について調査をしています。著作物としては、『大本教』があげられます。

ロランス・カイエー (Laurence Caillet) 女史 (パリ第十大学、民族学) は、現代行われている古代の習合にもとづく東大寺のお水取り儀礼について『若返りの水の儀礼』(*Le rituel de l'eau de jouvence*) という本を出版しました。その後の主要な著作として『山崎という家』(*La maison Yamazaki*) があげられます。この本はある女性の一生と彼女の信仰の経歴 (とくに巫との出会い) を描きます。また、『四季の祭と行事』(*Fêtes et rites des quatre saisons*) というフランス語の年中行事事典を編集しました。

パトリック・ベイレバール (Patrick Beillevaire) 氏 (国立科学研究センター、日本セン

ター) は、沖縄の歴史と民俗学の専門家で、「日本の村々における神々と祖先」(Dieux et ancêtres dans l'espace villageois japonais) という論文を発表しました。この記事はレヴィ=ストロース (Claude Lévi-Strauss) が創刊した『人間』(L'homme) という有名な雑誌の日本についての特集号に入っています。同じ特集号にカイエー女史、ベルトン氏、キブルツ氏、モクレール女史の論文も掲載されています。

ジャヌ・コビー (Jane Cobbi) 女史 (国立科学研究センター、日本文化) は、日本文化における植物の位置の研究から民俗の衣食住の研究に入りました。また、「酒飲みの神々と食いしん坊の祖先」(Dieux buveurs et ancêtres gourmands) というタイトルからもわかるように、神饌の研究にも触れました。

アメミヤ・ヒロコ (Amemiya, Hiroko) 女史 (レンヌ Rennes 大学) は、フランスのブルターニュ地方と日本の伝説を比較し、「あかまみれのおおしん」という論文を発表しました。

次に、若手研究者として、博士課程に在籍中のロランス・ラウルナト (Laurence Lahournat) さん (東洋言語文化研究所) があげられます。彼女は、古代宗教における人形の役割の分析を試みています。

また、同じく博士課程に在籍中のジャン=ミシェル・ブテル (Jean-Michel Butel) さん (東洋言語文化研究所) は、フィールド・ワークの形で日本全国における縁結びの神を祭る場所の類型論の作成を試みています。

以上の研究者は、神道に触れる研究者のリストの中で一番多いグループになっていますが、『人間』の特集号以外には、神道というテーマを中心にした本、シンポジウムや共同研究は行われていないのが現状です。

次に、歴史学の立場からみて、以下の名が上げられます。

まず最初にはフランシヌ・エライ (Francine Herail) 女史 (国立高等研究院名誉教授) のことを述べなければなりません。女史は平安時代の専門家であり、『御堂関白記』の全仏訳を刊行して朝廷の儀礼を分析しました。

エライ女史の弟子であるナタリ・クワメ (Nathalie Kouame) 女史 (東洋言語文化研究所、日本の歴史) は江戸時代の四国八十八ヶ所遍路の研究を経て水戸藩の宗教政策、とくに儒者である藩主の神道に対する立場を古文書を用いて分析する研究を進めています。

同じくエライ女史の弟子であるシャルロット・フォン・ベルシュル (Charlotte von Verschuer) 女史 (国立高等研究院第四部門歴史学) は、古代から中世までの日中交流を研究し、平安時代の朝廷の食事を調べ、現在、日本神話における稲や他の植物の役割を分析しています。

デュケヌ氏、ブロトンスさん、ロテルムンド氏は、1997年に亡くなったベルナール・フランク (Bernard Frank) 先生 (コレージュ・ド・フランス Collège de France 元教授) の研究上の系統を引き継いで宗教学の立場から神道をみています。

フランク先生は、日本仏教曼陀羅を分析して仏教の中における日本の神々を紹介しました。

ロベール・デュケヌ (Robert Duquenne) 氏 (フランス極東学院) は又、フランク先生のように仏教の立場から神道の考察をしています。「インドと日本の間の遍歴：象頭山とその他の聖山」(Pérégrinations entre l'Inde et le Japon: du mont en tête d'éléphant et autres montagnes sacrées) という論文の中で神体としての山についての論文を発表しました。その後、明治維新の時の神道政策に対する彼自身の意見を展開する論文を発表しています。

アルノ・ブロトンス (Arnaud Brotons) さん (東洋言語文化研究所) は博士論文として、飛鳥時代から院政時代までの熊野詣を中心にして平安時代の熊野信仰を研究しています。

これまで挙げた研究者の中で、神道にもっとも強い関心を示すのは、確かに、ハルトムント・O・ロテルムンド (Hartmunt O. Rotermund) 氏 (国立高等研究院第五部門) で、『万葉集』の時代の魂の概念から『沙石集』の仏訳、江戸時代の疱瘡神信仰をへて、明治時代の大教まで神道の様々な面についての論文や本を発表しています。民俗宗教、修験道、古代神道という広い分野にわたって神道を研究しています。また、日本の古代信仰に関する資料の仏訳の編集もおこなっています。

アラン・ロシェー (Alain Rocher) 氏 (ボルドー第三大学、日本語科) は、比較文学の専門家ですが、日本古代文学に興味をもって『古事記』を読破しました。同じ理由から古代神話に強い感心を持ち、それをまとめて『日本における神話と君主権』(*Mythes et souveraineté au Japon*) という本を出版しています。十年ほど前から私は彼と一緒に『古事記』と『日本書紀』のフランス語全訳出版計画をすすめています。

この長いリストの最後に私自身の研究についても少し話させていただきます。今回フランスにおける神道研究紹介者の立場から自分の研究について話すのは、妙な感じがしないでもありませんが、殯の儀礼を中心とした上古代の死と葬送儀礼、そして『古事記神話の構造』という本を出版した後、現在は神道、とくに江戸時代の神道についての研究を進めています。

### Ⅲ. むすび

これで、フランスにおける神道研究の現状が皆様によく理解していただけたのかどうか、私にはちょっと疑問が残っています。以上をまとめて見ますと、自分の分野の研究を進めながら、神道に触れる研究者の方が、フランスの日本研究の世界ではずっと多いことに気づきます。そして、逆に神道という研究分野を選んだ研究者は本当に少ないことは明らかです。また、民俗学の立場から神道を考察する人の数が圧倒的であることは、神道よりも民間信仰への興味の方が強いことを意味するといえるでしょう。

テーマとして、ごく最近、明治時代の神道についての論文が多くなりました。デュケヌ氏、ロテルムンド氏、キブルツ氏、ブシ女史、それに私もこのテーマについて論文を書きましたが、不思議なことですが、同じテーマを研究しながら相互に意見交換をすることもなく、他の研究者が同じテーマを進めていることを知らずに各人が自分の研究を進め

ている状況です。この明治維新という時代区分が示すように、その傾向として、フランスにおける日本研究の全体の傾向と同じく近現代の神道の研究が盛んになっているのが一つの特徴だといえます。

## 質疑応答

### 【司会】

どうもありがとうございました。神道研究者といえる人は少ないけれども、フランスでもいろいろな形での神道研究が行われているという現状をご紹介いただいたと思います。しかし、フランスでも、いろいろな分野での研究があるということがわかりましたので、もっと詳しく聞きたかったと感じられた方もおられると思います。そうしたことを含めて、質問をお願いします。

### 【奥山倫明】

南山宗教文化研究所の奥山と申します。今日のお話にはなかったと思いますが、何人かフランス人の研究者がアメリカ合衆国で活躍されていますね。そういう方々の一具体的に言うとグラパール (Allan Grapard) さんですかーそういう方々の研究は、フランス本国ではどういうふう to 評価されているのでしょうか。

### 【マセ】

グラパールさんのことですが、やはり大学では全部英語です。フランス語での論文は1つしかありません。だから、アメリカの研究者はアメリカのほうだと思います。

### 【松村一男】

和光大学の松村です。最近、比較的、フランスでの研究が明治とか近代、つまり近代の神道や日本の民間信仰などの研究に移行しているというのは、午前中のドイツ語圏でもやはり同じような動きがあると言われていたと思いますが、ヨーロッパの神道研究のいろいろな文化圏の中での相互の動き、何かお互いに刺激し合っってそういうことが起こっているのでしょうか。同じような研究の変化がみられるのか、という点についておうかがいしたいと思います。フランス語圏の人たちとドイツ語圏とは交流はあるのですか。

### 【マセ】

はっきり言えば、あまりないです (笑)。でも、たぶんヨーロッパだけではなくてアメリカの場合も同じだと思いますが、古代の研究は昔はとてもさかんだったんですね。それが、だんだん近代のほうへ移った傾向はとても強いと思います。いまでも私が一番気になるのは神話のことです。神話のことを教えると学生は興味をもちますが、自分の研究対象にしようとはしません。やはり現代、できれば近いものを研究したいという傾向があります。古代をやると、漢文を勉強しなければならないというのが1つの理由です。まあ、それだけではないと思いますが……。

### 【司会】

それは、フランスである程度独立してやられている現象ということですね。

### 【市川裕】

東京大学の市川です。仏教と神道についておうかがいしたいと思いますが、「神道研究の

現状と課題」とありますので、本当は神道だけを聞くべきだと思いますが……。

私の感じだと、フランスで、仏教とキリスト教を比較する研究は比較的多いのではないかと感じています。そういう場合の仏教に対する関心と、例えば、日本文化を研究する際に神道がどうしても必要である、そういう形で神道を研究されているのではないかと私自身は考えています。

仏教と神道というものを考えた場合に、日本を研究する上では神道が大事であって、仏教というのはある意味で普遍的な宗教として取り上げられる傾向があるのではないかと思います。先生はその点をいかがお考えでしょうか。

### 【マセ】

日本の文化を理解するためには、もちろん両方の研究をしなければならないと思います。ただ、私自身のことではなくてフランスの研究者の立場から見ると、やはり仏教の研究の伝統がありまして、サンスクリットから中国仏教、これはとても立派な研究があります。

それから、仏教となると、これは長い間、経典についての勉強です。だから、思想としての仏教が対象となる。思想としての仏教があり、これをキリスト教と比較したものとしてドルバク (de Lubac) の研究があります。でも、現在はキリスト教と仏教を比較することについては、それほど進んでいません。

そして、神道に対して 20 世紀の初めのマルタンみたいな神仏の理解においては、神道そのものに対しての読みは本当に浅かったということになります。やはり、仏教が圧倒的である。それも、やっている人間の「重さ」によるといえるかもしれない。例えばベルナール・フランクのような偉い学者が見ても、彼が選んだのはやはり仏教です。そして、こういう偉い方がいれば、神道の研究はちょっとこれと比較できないことになる。だから、フランク先生の弟子たち、つまりロベール (Robert) さんとかジラルール (Girard) さんは皆仏教のことを研究します。あと民間信仰を研究する人はロテルムンドさんのところへ行きました。

だから、神道を研究対象にするのではなくて日本の民間信仰というものが対象となっています。ですから、神道そのものを研究する人は本当に少ないです。まあ、残念ですけども、そうだと思います。

### 【司会】

市川さんは『イエスは仏教徒だった?』という本を訳されたりしているので、今の質問もそういうことに関わるのかなと感じました。市川さんの質問の趣旨は、フランスで仏教を見る場合には、宗教としての価値というか、キリスト教と仏教という世界宗教としての比較という観点からの視点で眺める。それに対して、神道というのは宗教というよりは、むしろ日本文化を理解しようとするときに神道も入ってくる。つまり、日本の仏教と日本の神道を研究する場合に、その背景にある視点が違う可能性はないですかという趣旨だと思うのですが、マセ先生、いかがでしょうか。

### 【マセ】

確かに違います。不思議なのは、去年の秋、一専門家の仕事ではなかったですが『ル・

モンド』(Le Monde) という新聞に世界じゅうの宗教の地図を載せました。その中にやはり仏教圏の国々がありました。日本の場合は神道になっていました。仏教ではなくて神道だったので、本当に不思議でした(笑)。でも、それは珍しいと思います。

**【平野孝國】**

新潟大学の平野と申します。先生に『古事記』の翻訳などがおありだという話をちょっとかがいしましたが、フランスで日本のことに関心をお持ちのかたで古典文学、『古事記』や『日本書紀』、こういうふうな書物を読めるような教育をやっているのでしょうか。

**【マセ】**

一生懸命やりますけれども(笑)。できるだけ『古事記』か『日本書紀』を読ませるように。でも、むずかしいでしょうね。日本人にとってもむずかしいのだから、もっとむずかしい。しかし、全部ではなくても部分だけ読ませます。まあ、私の学生だけですが、いまのようなことを皆しています。

**【西條勉】**

専修大学の西條です。私はいまここで話題になっている『古事記』、『日本書紀』の研究を専門にしています。1つおうかがいしたいのは、フランスで『古事記』、『日本書紀』のテキストというものが、日本神道を研究するうえでどのように関わっているのかをおうかがいします。日本での研究、つまり『古事記』、『日本書紀』を研究する者は、どちらかというとなら神道の問題と切り離して扱っている人が多いかと思いますが、その点についてフランスでは『古事記』、『日本書紀』と日本神道思想の関わり、このようなことをどのように考えて論じられているのか。そのあたりを教えてくださいたいと思います。

**【マセ】**

正直なところ、あまり論じられていません。だから、『古事記』、『日本書紀』についての論文は最近全然ありません。本当に残念なことばかりですけれども。だから、それは神道の観点からか、歴史の観点からか、という問いはその意味がありません。私自身が『古事記』のことをやったときは、やっぱり神道への関心からはじめました。結局、構造主義的なものになりましたけれども、最初はやっぱり神道から入りました。だから、その後ずっと国学をやりました。

**【西條】**

簡単でけっこうなのですが、その辺について先生のお考えをお聞かせいただければありがたいのですが……。『古事記』、『日本書紀』のテキストと神道思想の関係ですね。これらをどのように扱う可能性があるのか、という点について。

**【司会】**

マセ先生自身が『古事記』、『日本書紀』を扱うときに、それを神道の中にどう関係づけているか、つまり、個人的な見解をご質問されました。

**【マセ】**

それは、別の範疇の問題になります(笑)。学生時代の思い出にさかのぼりますが、最初

は森有正という日本人の先生から『神典』という本をもらいました。『神典』というのは、『古事記』、『日本書紀』、『延喜式祝詞』、そして『万葉集』を少々、そのぐらいの聖書みたいなものです。だから、それを見て聖書と同じように、まあ、日本で1つの聖書であると思って読みました。

『古事記』の分析をしながら、そして、その後の時代の神道を見て、ただ、ちょっと甘いということになって……。というのは、中世神道の場合は『古事記』のことがほとんど出ていません。『日本書紀』とか『先代旧事本紀』のことがよく出ていますが、『古事記』のことはあまり出ていない。だから、ちょっと疑問が生まれました。『古事記』と、その後の神道の関係についてと今でもわかりません。理解できません。研究不足だと思いますが、いまのところは勉強中です。

**【司会】**

これは大きな問題で、日本人の間でも細かく論じる必要のあるテーマですから、ここではこの程度にさせていただいて……。何かほかにありますか。

では、司会者ですが、一つ質問させていただきます。午前中のご説明をうかがって、フランスの研究はよく言うと個性的ですが、悪く言うと横のつながりがない。そして、共同研究などもほとんどないということのような印象を受けました。単純に考えて、これはフランスの個人主義によるということなののでしょうか。あるいは、まだ神道研究というものがあまり人が多くないので、そういう段階にとどまっているということなののでしょうか。個人的な見解でけっこうですので、お聞かせください。

**【マセ】**

やっぱり両方あります。フランスの個人主義があるというのがひとつ。それから、やはり人数の問題で、今でも少ない。そして、経済的にそんなに効果がないですね。だから、研究者の数がふえるという可能性はまず少ないと思います。

**【司会】**

ありがとうございました。これで第3セッションを終わりにいたします。(拍手)